



調律師 鈴木均が語る

ペダルの使い方まで目を見張ったのは、ウクライナ出身で米国のピアニスト、チエルカスキー（1909～95年）です。94年に電気文化会館（名古屋市）で開かれた、伝説のような演奏会を担当しました。

東京の先輩調律師から「チエルカスキーの左ペダルはすごい！」との事前情報があり、本番中に舞台袖のぞき窓から双眼鏡で見ると、右足も左足もパタパタと素早く動いていて、それはもう白鳥のごとく…。

前回触れたように、右ペダルはわずかに上下させピブラート風に動かすこともできますが、左は強いばねのせいで重いので、素早い上下は難しく、多くの人は

## 可動域 10段階に踏み分け

踏み込むか放すだけです。翌日同じ楽器でまねしたところ、足がつってしまいました。独自の工夫によるチエルカスキーの音の秘密を垣間見た思いでした。

超絶技巧で知られるフランスのカツァリス（51年～）も、左ペダルの可動域3ミを10段階に踏み分けていると本人から聞きました。

「ぎゅっと踏んだときに、（内部で）ハンマーが隣の弦の当たる直前まで大きく動くようにしておいてほしい」とコンサートのために言われる。「もうやっである」と伝えても踏んで確認し、「オー、グッド」。やはり一番気になる場所なんでしょう。

例えば、モネの睡蓮の絵は同じ色調の濃淡だけで描かれています。カツァリスの微妙な音色のマジックも、そういう文化が背景にあるのかもしれない。

これらは、上下10ミしか動かない鍵盤の中で「使える技術は何でも試してみよう」と天才たちがつくってきたオリジナルの表現です。普通の人々が努力してできることは違いますが、特異な能力があるからといって良い演奏ができるわけではありません。ピアノの特性を音楽的にうまく生かすことができたときにだけ、表現の幅が広がるのだと思います。

（聞き手・南拡大朗）



シプリアン・カツァリス



シューラ・チェルカスキー

## ペダルの魔法使いたち